

童と改名している。

尺八講習会の隆盛

大正時代に入ると逸童派は全盛期を迎えることとなった。会員数は一人に達し、国内各地はもとより、満州・朝鮮・樺太などにも支部ができ、活発な普及活動が展開された。河本逸童は全国各地の支部をまわるため、五年の歳月をかけて行脚したという。

独立当時の月謝は、今のように金額が定まっていたわけではなかった。稽古場の入口に「次回は米・味噌・酒」などと、師匠がその都度生活に必要な品を書いていたので、それを見て門人達が適当に持参したという。

逸童派を支える吹き手として、池田逸漣・牧野逸陽・清水逸閑・今尾逸波などの名手を輩出した。池田逸漣は独自の楽譜出版を始めたことが原因で、後に逸童派から分離独立して、「尺八逸漣会」を設立した。

特に牧野逸陽・清水逸閑・今尾逸波の三人は、逸童派の三役と呼ばれ、逸童派の基盤作りに大きく貢献した。戦前、牧野逸陽は宗家の命を受けて、樺太の豊原に派遣されたが、戦後は東京支部長として名実共に逸童派の大黒柱役を果たした。昭和三年十月九日に樺太劇場で開催された、佐藤絲豊主催の琴友会演奏会に出演するなど、北海道の邦楽関係者とも縁が深かった。

牧野逸陽の門人だった清水逸閑は、高山市を本拠地として活躍するとともに、昭和二十六年四月には「尺八閑月会」を設立して活動の母体とした。

敗戦の色が濃くなった頃、河本逸童は上野桜木町の私邸を出て、新宿の三采町に居を移した。そして、清水逸閑と妻の三人で会社組織を作り再出発した。しかし、新居が陸軍参謀本部の直ぐ前の高台にあったことから、米軍の爆撃を受け、一切の家財を焼失してしまつた。その後、一時甲府に疎開したが、ここでも空襲を受け、不幸にも負傷してしまつた。

道東・道北から始まつた

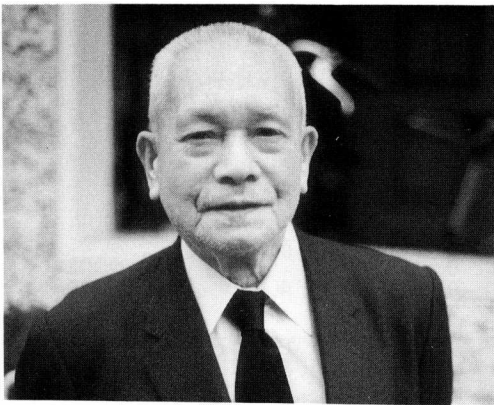
逸童派の普及

中島 聖山

これまで琴古流に関しては、荒木派・川瀬派・鈴森会などを取り上げ、北海道における黎明期を中心に述べてきたが、今回は琴古流逸童派について記述する。

逸童派の誕生

琴古流逸童派の初代宗家河本逸童は、本名を見崎健次郎といい、明治十五年八月二十一日に名古屋で生まれた。恵まれない家庭に育



牧野 逸陽

つた健次郎は、大阪のとあるお寺に小僧として預けられるなど、少年時代は苦勞を重ねた。十四歳のとき、山本逸翁に師事して尺八の手ほどきを受けた。その後、村瀬三之助の系統を引く岡田魯山に入門し、琴古流本曲を学んだ。さらに愛知県を基盤に勢力を伸ばしていた、西園流の初代兼友西園にも師事するなど、幅広い修業を積んだ。明治二十年頃、当時尺八界で一世を風靡していた二代目荒木古童に師事し、荒木派の芸風をも身につけた。

明治四十四年二月十五日、結婚して川本逸童を名乗って、一派を成す志を立てた。その手始めとして、上原六四郎の邦楽理論を参考し、明清楽の拍子符点をベースにした尺八楽譜を考案して出版した。これは、自分の修業時代を顧みて、楽譜がなかったばかりに苦勞したことを思つてのことだった。

東京上野の桜木町で「逸童派尺八講習会」を設立して独立した川本逸童は、門人の育成に全精力を傾注した。川本逸童の人柄であるう、門人の中には皇族の宮様もいて、逸童派は盛況を極めた。事情があつたのであろうか、大正七年十二月二十五日に見崎逸翁と改名したが、翌大正八年七月五日には、更に河本逸

優雅な邦楽の音づくりにご奉仕する

邦楽〈琴・三絃〉の店

川村楽器店

札幌市中央区南3条西2丁目(HBC三条ビル) ☎代221-4970

■営業時間／午前10時～午後7時／月曜定休日

●各種カードをご利用下さい。

傷ついた体を持って、生まれ故郷の名古屋に避難したが、ここで三度目の爆撃を受けた。昭和二十二年十一月三日河本逸童は名古屋の市営住宅で、波瀾に満ちた六十六歳の生涯を終えた。



関月会 前列中央・清水逸閑

二代目逸童の襲名

初代逸童亡き後は、気象台に勤務していた初代の実子である見崎弘和が、二代目河本逸童を襲名した。昭和四十一年六月五日、中日新聞社の後援により、名古屋市カーネーションホールで開催された襲名披露記念演奏会には、札幌の高崎逸風が北海道を代表して出演した。初代逸童没後、二代目襲名までの二十年近い空白期は、逸童派発展の重要な鍵を握っていた楽譜を焼失したと、ほぼ同時に宗家を失ったという二重苦から立ち直るための、逸童派の混迷期といえよう。

この混迷の時代にありながら、逸童派の再建を夢見て組織の存続に尽力したのは、東京の牧野逸陽はじめ、名古屋の水谷逸城、高山の清水逸閑、岐阜の今尾逸波らだった。特に清水逸閑は、全国を足跡し組織の堅持に努め

た。

昭和四十六年当時、逸童派尺八講習会は二代目宗家を中心に、二百五十名の会員を抱え、名古屋に本部を置くとともに、東京・高山・岐阜など全国に十七の支部を設置する組織にまで再建された。北海道では稚内と札幌に支部が設置され、先崎逸瓏が稚内支部長を、そして高崎逸風が札幌支部長を務めていた。

阿部羅逸鈴の稚内教室

高崎逸風は本名を末吉といい、大正十四年三月十四日稚内で生まれた。中学時代から音楽器に興味を持ち、進軍ラップを吹いたりしていた。歯科医師を志していた彼は、日大歯学部を卒業後、東京医科歯科大学の専攻科に入学したが、ここで生田流箏曲をたしなむ同窓生と知り合いとなった。彼女を伴侶とすることを決意した高崎末吉は、昭和二十六年に専攻科卒業と同時に、彼女を伴って郷里の稚内に帰り歯科医院を開業した。

学生から社会人になったばかりの高崎末吉ではあったが、夫であり、医師であり、経営者であるという一人三役をこなす日々を身を投じることとなった。そんなある日のこと、初めて来院した沢井という患者さんが、風呂敷包みを大事そうに治療台まで持ち込んで、膝の上に置いていた。よほど大切なものなのだろうと思いつつ治療をしていたが、気になったので尋ねてみると尺八だという。少年の頃から楽器に興味を持ち、ラップを独習して吹いていたし、夫人が生田流の箏を弾いていたこともあり、高崎末吉は治療が終わるのを待って話を続けた。すっかり心を引かれた彼は患者さんから尺八を借り、技巧室に入って吹いてみたところ、習いもしないのに「ボー」と良い音がした。聞いてみると沢井さんは、琴古流河本逸童派の阿部羅逸鈴の門人だとい

う。高崎末吉は時間を作って、直ぐに阿部羅逸鈴を訪ね、入門を願った。阿部羅逸鈴は逸童派三役の一人、清水逸閑の系統を引く飯利逸雲の門人で、金沢市で新聞記者をしていた。昭和二十五年頃稚内に転居し、尺八の専門師匠として教室を開いてい

た。高崎末吉が入門した当時、教室に通っていたのは五、六人だったという。こうして阿部羅逸鈴の門人になったものの、高崎末吉は開業医という仕事柄、毎週時間を決めて定期的に稽古に通うわけにはいかなかった。そこで、自宅を稽古場に開放し、週一回阿部羅逸鈴の出稽古を願った。開業して間もないころもあり、忙しい毎日だったが、熱心に稽古に励んだ甲斐があり、直ぐに初伝免許状を得ることができた。しかし、残念なことに高崎末吉が入門して二年ほどして、阿部羅逸鈴は稚内を去っていった。

先崎逸瓏が稚内教室を継承

阿部羅逸鈴が離稚した後、稚内教室は高弟だった先崎逸瓏が継承することとなった。先崎逸瓏は稚内出身で、当時の電電公社・稚内電報電話局に勤務するかわら、尺八道を極めようと精進を重ねていた。高崎末吉は他の仲間たちとともに、先崎逸瓏に転門して尺八を吹き続けた。こうして先崎逸瓏から中伝免許状をもらった高崎末吉は、いよいよ尺八の魅力に引きつけられ、当時稚内で活躍していた山田流尾崎社中の賛助を得て、菅野ホテルや市民会館で盛んに開催された合奏会に積極的に参加して腕を磨いた。

中央で活躍していた清水逸閑や池田逸連なども、来道の度に稚内を訪れ講習会を開くなどして、良い刺激を与えてくれた。特に池田逸連は昭和三十一年、三十三年になって、楽譜出版を契機に逸童派から独立して逸連会を組織したこともあって、北海道の陣容を整えようと頻りに来稚した。

しかし、先見の明を持った高崎逸風は、稚内の将来に見切りを付け、北の都・札幌への転居を考えていた。

道東・釧路に根づいた逸童派

釧路は北海道の尺八界にあって、最も早く組織化の地盤を作り上げた所である。先ず明治四十四年に琴古流の各派の有志が集って、同好会としての「八千代会」を設立した。初代会長を務めたのが福岡揚水だった。その後

舞踊・演劇・衣裳・小道具



松竹衣裳株式会社

東京店 東京都中央区新富2-2-8 松竹新富ビル 電話03(3552)5921(代)104
大阪店 大阪市西区南堀江通り2-1-3 松竹大阪ビル 電話(538)1181(代)550
九州出張所 福岡市博多区中洲5-1-22 松月堂ビル内 電話(272)0141(代)810
北海道出張所 札幌市中央区南2条西6丁目 大友ビル 電話(011)219-0805(代)060

舞踊小道具も営業いたしております。衣裳同様御用命をお待ち申し上げます。

大正二年に二代目として山口藤太郎（後に都山流に転門し、山口珠山として活躍）が会長に就任し、続いて大正七年には佃重雄が三代目会長に就任している。逸童派に所属し活躍していた室井逸楓は、昭和九年に釧路琴古会の会長に就任している。

大正十二年に三曲協会の前身である「釧路邦楽普及会」が設立された。釧路市長の二木千年を会長とし、琴古流の佃重雄が副会長を務めて、糸方の横田慶勢・北条光子・北条操声など、主だった邦楽家が協力する形で会は運営された。釧路八千代会の会員となった室井逸楓は、門人を伴って積極的に舞台を踏んだ。昭和五年九月二十七日に釧路市公会堂で開催された八千代会の演奏会には、門人若月逸逃らを連れ出演している。また、新しいものにも積極的に立ち向かい、大正時代に流行しだした七孔尺八に手を染めたりもした。翌昭和六年六月六日には、八千代座で七孔尺八の演奏会を開いている。既存の組織から脱却し、独自の活動母体を求めていた室井逸楓は、昭和七年に「逸楓会」を設立した。そして、同年六月四日に商工会議所のホールで、第一回目の逸楓会の演奏会を開催した。発会を記念して開催したこの会が成功したのである。三か月後の九月二十三日に、今度は釧路市公会堂で逸楓会の演奏会を開催している。翌八年五月十三日も同様の会を開催したが、十月十五日には札幌から佐藤岡豊を招聘して、特別演奏会を開催している。樺太にいた牧野逸陽から天才箏曲家・佐藤岡豊のことを聞かされていた室井逸楓は、佐藤岡豊が昭和八年六月に樺太から札幌に転居し開軒したことを知って招聘したのである。会には黒沢佐登梅・松尾栄子・蛭子美都井など糸方各社中が賛助出演したほか、琴古流竹風会や都山流の伊藤龍捷（後の捷山）なども出演した。室井逸楓は佐藤岡豊を相手に「七小町」「春の海」「残月」の三曲を演奏し、邦楽の神髄を披露した。

こうして室井逸楓の活躍により、釧路に多くの門人を抱え、逸楓会は北海道で最も勢力のある逸童派の組織にまで成長した。しかし、

室井逸楓が琴古流荒木派に転門し、昭和九年春に釧路琴古会を設立したことで、逸童派の勢力は一変してしまふ。失った流勢を建て直すべく、宗家の命を受け昭和十年に宗家補佐役の今尾逸波が釧路に入り、一年半程指導普及に尽力したが地元民の壁は厚く、願いをかなえることは出来なかった。

昭和四十年代から札幌を中心に発展

昭和三十八年に稚内から札幌に転居した高崎逸風は、師を求めて高橋是風の門を叩いた。高橋是風は国鉄の職員で、樺太時代に初代河本逸童に師事して逸童派を学んだ人だった。早速稚内に通い始めたが、高橋是風が指南免許を持っていなかったことから、昭和二十六年以降数度にわたって来道していた家元補佐役の清水逸閑に転門して、奥伝以降の免許状を取得した。昭和四十五年には師範に昇格すると同時に門人の育成を始めるとともに、札幌閉月会を組織して、高山市にある閉月会の支部機能を果たすようになった。更に昭和五十

一年十月一日には大師範に昇格し、清風斎逸風を名乗って現在に至っている。

昭和四十年代に生田流箏曲家・太田里子の系統を引く久郷幸枝に師事して、三絃を習ったことのある高崎逸風は、古曲の合奏を得意とした。准師範に昇格した際、高橋是風の推薦で北海道琴古会に参加し初舞台を踏んだ。小樽で開催されたその会では、高橋是風と一緒に高橋麗賀（高橋是風の娘）の糸で「明治松竹梅」を演奏した。

大師範昇格のときは上京し、川瀬里子の娘川瀬白秋の糸で「夕顔」を演奏している。

河本逸童の来道

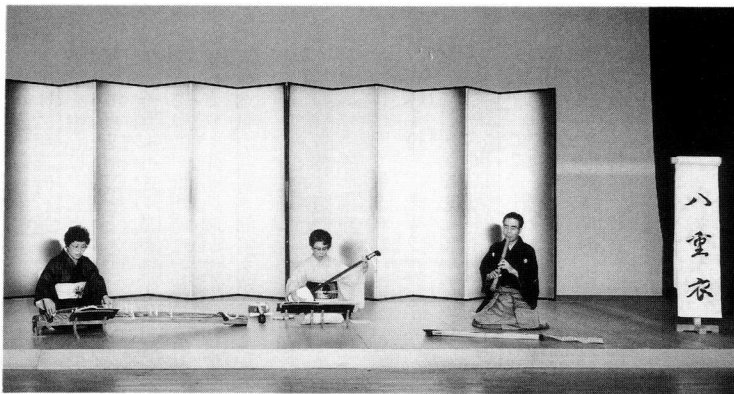
逸童派の宗家・河本逸童が来道した記録がある。避暑を兼ねて来道したのである。大正十五年八月十四日、河本逸童と河本逸調の二人は、旭川商業会議所のホールで開催された、地元三曲同好会主催の演奏会に特別出演している。この会には地元の尺八愛好家として、吉村敦・阪口實・三浦信三郎らが出演した。この時、河本逸童は半月ほど旭川に滞在して講習などを行った。

都山流で活躍した伊藤彩山が、大正六年頃から旭川で琴古流河本逸童派を教えていた境という人物に、尺八の手ほどきを受けたといっていることから、旭川は道内で最も早く逸童派の根づいた所といえよう。しかし、池田逸連の分派独立により、その後旭川は橋本逸筆を中心とした逸連会の地盤となっていく。

逸童派の現況

札幌の高崎逸風をはじめ、稚内・苫小牧など十二人の有資格者が門人の育成に尽力し、逸童派の普及発展に努力している。

昭和五十三年七月八日に札幌市教育文化会館小ホールで開催された、第二十四回北海道琴古会定期演奏会には、今尾逸波が特別出演して「青柳」を演奏した。



北海道琴古会 尺八・高崎逸風

かつら 床山

板 坂

板坂又二郎

■店 〒130 東京都墨田区横川2丁目11番5号（齊藤ビル1階）☎(03)3621-0166

■自宅 〒110 東京都台東区根岸2丁目21番17-601号☎(03)3875-6183